

第2 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成14年に「韓国語」が大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の外国語科目として加えられて今回で第5回目である。その間、出題方針に若干の変更（例えば、長文問題の素材文の長さに関する制限をゆるくするなど）を加えてきたが、基本的な出題方針に変更はなく、第4回のセンター試験の方針を踏襲した。

つまり、平成18年度の試験問題を作成するに当たっては、以下の点に留意しつつ行った。

- (1) これまでのセンター試験の試験内容に準拠する。
- (2) 高等学校教科担当教員からの意見を最大限尊重する。
- (3) 予想される平均点が、他の外国語科目との著しい不均衡が生じないように難易度を調整する。

さらに具体的には次のような方針によることにした。

- (1) 音声・文字表記、文法・語い、会話、長文の四つの領域に分けて出題する。
- (2) 出題に際しては、日本の韓国語教育の現場で使用されている教材、また市販されている教材や辞書類を参考にする。
- (3) 表記法については、韓国文教部告示第88－1号「한글 맞춤법」(1988)及び韓国国立国語研究院『標準国語大辞典』(1999)に基づく。また延世大学校言語情報開発研究院『延世韓国語辞典』(1998)をも参考にした。韓国と北朝鮮で違いが見られる部分については、原則として韓国の方針に準拠する。ただし、後者に準拠する教育を受けた受験者が著しい不利益を被らないように十分配慮する。

高等学校における韓国語教育を取り巻く状況も、従来と本質的に変わっていない。『国際文化フォーラム通信』などの情報によれば、韓国語をカリキュラムに組み込む高等学校の数は年々増加しているが、高等学校学習指導要領では依然として「その他の外国語」として扱われており、その目標及び内容についての具体的な記述がない状態が続いている。そのため、平成18年度の出題はこれまでどおり「ドイツ語」及び「フランス語」に関する高等学校学習指導要領の内容に準拠して出題するという従来の方針にも変化はない。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 韓国語の発音に関する基本的知識を問う問題と漢字語の読み方を問う問題から構成される。発音については、主として音変化を扱い、出題形式は二つに分かれる。一つは見出し語の発音と同じ初声になる単語の数を問うものであり、もう一つはつづり字と発音の関係を問う問題で、ハングルを用いた発音どおりの表記を与えて正しいものを選択させる方式である。漢字語の読み方については、基礎的でありながら、学習者が混同しやすいものを中心に難易度や使用頻度を考慮してバランスよく出題した。

- A 見出し語の発音と同じ初声になる単語の数を問う問題。文字と発音のかい離に対する基本的な知識を問う問題であり、単語も基本的なものを中心とした。見出し語の発音と同じ初声になる単語の数を問う出題の形式上、受験者の知識を正確に判定しうるのかという点が疑問

視されるが、解答結果を見ると低得点者の正答率が低く、高得点者の正答率が高いことが分かり、受験者の知識が正答率に反映していることが確認された。また、この問題の正答率はかなり低く、受験者にとって難易度の高い問題であった。

B つづり字と発音の関係を問う問題。

問1 2単語間における終声の初声化（連音化）と口蓋音化とに関する問題である。初声化について誤答率が高かった。

問2 激音化に関する問題である。

C 韓国語の漢字語の読み方を問う問題。

問1 日本語で「ショク」という音を持つ漢字「植」、「職」、「触」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。

問2 日本語で「カク」という音を持つ漢字「獲」、「穫」、「拈」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。「獲得(획득)」と「収穫(수확)」は基本的な語いでありながらも、「獲」と「穫」の韓国語の読み方を正しく理解していないものがあり、正答率はほぼ5割であった。

問3 「矛」、「武」、「模」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。「矛(모)」と「武(무)」の韓国語の読み方を正しく理解していない解答が若干見られた。

第2問 文法・語いについての知識を問う問題。出題に際しては、基本的な文法・語いととも、多様な意味・用法をもつ文法・語いや日本語との表現の違いなど、学習者の間違いやすい点にも重点を置いて取り上げた。

A 用言の活用についての知識を問う問題。変則（変格）用言の活用形から辞書の見出し語を見つけ出す問題である。学習者が実際に辞書を引きながら韓国語の文章を読解する際に必要となる作業の再現である。

問1 問題文の活用形「걸어서」からはㄷ変則用言の「걷다」とㄷ語幹(ㄷ変則)用言の「걸다」の両方が導き出される可能性があるが、問題文の意味「歩いて」から「걷다」が正答である。形だけから判断したためか、約1割が「걸다」を選択した。

問2 問題文の活用形「해로운」から「해로우다」「해로울다」「해롭다」が導き出されうるが、「害になる」との意味からㄷ変則用言「해롭다」が導き出される。「해롭다」はやや難しい単語だが、過去問題にも出ているためか、正答率は非常に高かった。

B 与えられた単語（規則用言・変則用言）の活用形を問う問題である。変則活用のみならず規則活用についても正確な知識を持っているかどうかを問うた。

問1 「부르다」はㄹ変則用言だが、「치르다」は語幹がㄹで終わっていてもㄹ変則ではない動詞であることを知っているかどうかを問う問題。半数以上が誤ったのは「치르다」の使用頻度が低かったためと思われる。

問2 ㄷ語幹(ㄷ変則)用言のㄷ脱落現象と하다用言の品詞判別を問う問題。約7割がその両方を正しく判別できていた。

C 助詞（体言語尾）・語尾（用言語尾）と語い及びそれらの組合せに関する知識を問う問題。

問1 「인하다」と共起する助詞（体言語尾）は「으로」であることを知っているかどうかを問う問題。約3割が「에」を選択したが、「으로 인해」と「에 의해」がいずれも日本語

では「により」と訳されることにより混同したものと思われる。

問2 「안경」と「끼다」の共起関係を知っているかどうかを問う問題。日本語では「メガネをかける」であるためか、約2割が「걸다」を選択した。

問3 いずれも日本語の「置く」に当たる「놓다」、「두다」をどのように組み合わせて日本語の「置いておく」を表現するかがかぎだが、一般的に補助動詞として「놓다」が用いられるためか、約3割が誤って「두어 놓았다」を選択した。

問4 日本語の「～たり～たりする」に当たる表現が「～았다 ～았다 하다」であることを問う問題。「～たり」は「～거나」とも訳しうるが、「～거나」は例示に用いる語尾であり、相反する動作の繰り返しには用いられない。

問5 「～ㄴ 김에」という形を知っているかどうかを問うた。正答率は高かった。

問6 語いの知識を問う問題。正答の「공교롭게도」も選択肢もやや難しい単語だったためか、正答率は7割台だった。

D 最も近い意味のものを選ぶ入れ替え問題。単に語い・表現を問うだけでなく、文法形式の意味・機能を絡めた。

問1 順次の意味機能を持つ語尾「～아(III-0)」を、会話体では「～아 가지고(III-0 가지고)」と表現することが多いことを知っているかを問う問題。「～아」と「～고」がいずれも多様な意味機能を持ち、言い換えが可能な場合とそうでない場合があるため、約3割が誤って「싸고」を選んだ。

問2 副詞「급히」を動詞の連用形(III-0形)「서둘러」と言い換えられるかどうかの語いの問題。「서두르다」と形の似た「서투르다」を正しく区別すること、動詞に語尾「～게」がついた形は副詞として用いられないことなど、やや複雑な知識が必要である。

問3 「가지 말랬어」が「가지 말라고 했어」という引用形の縮約であることを問う文法の問題。「～지 말다」の命令引用語尾が「～지 말라고」となることを知っている必要がある。「～지 마라고」は正しい形ではない。

問4 「보내다」の類義語「부치다」をつづりとともに正確に知っているかどうかを問う問題。[부치다]という音で覚えていたのか、2割半近くが「붙이다」を選んだ。

問5 「지나지 않다」という表現と類義の四文字熟語「불과하다」を選ぶ語いの問題。漢文に由来するやや難しい表現だが正答率は8割台だった。

E 与えられた日本語の意味を韓国語で表現する、作文の力を問う問題。日本語との文法形式の配列の違いや単語の共起関係の違いに注目した。

問1 日本語の「(人)のところへ」は韓国語では「에게」「한테」で表し、「장소」など「ところ」を表す単語は使われないということを問うた。正答率は6割台と低かった。基本的な助詞だが日本語との表現上の大きな違いなので、しっかり押さえておく必要がある。

問2 日本語の「なくもない」を韓国語では単語の組合せが異なる「있기는 하다」と表現することを問うた。正答率は高かった。

問3 助詞(体言語尾)「와/과」は先行語と後続語をつなぐ位置でのみ使われるが、「하고」はそのような制限がないことを知っているかどうか問う文法問題。高度な知識であるためか、正答率は5割程度だった。

問4 理由を表す語尾は様々な条件によって使い分けがあるが、「기다려 줘」のような命令形にかかる場合は「～니까」「～을 테니까」が用いられる。極めて基本的な知識であるため、正答率は非常に高かった。

問5 「銀行でお金をおろす」の「おろす」は、韓国語では「物を上から下へおろす」とか「物を引き出す」といった意味の動詞ではなく、「預けたものを取り戻す、返してもらう」という意味の「찾다」を使うということを知っているかどうかを問う語いの問題。解答は「끌어냈다」「내렸다」「찾았다」にほぼ三分された。

第3問 与えられた会話から日常生活における自然なシチュエーションを推測して対話を完成させる問題。基礎的な語い力と対話を正しく読み取って適切なやり取りを行う能力を問う問題である。例年の会話問題は正答率が高すぎて、学力判定の有効性に欠けるのではないかとの反省から難易度を少し上げたが、ほとんどの問題で正答率が8割か9割をこえた。だが高等学校教科担当教員からは「会話の自然さ」にこだわりすぎて、高等学校でのみ学習した受験者には言い回しが難しすぎるので、「生きた韓国語」にこだわらず、多少どこちなくとも学校で学ぶ基本的な表現を使ってほしいという意見が出された。このような意見を尊重しつつ、学力判定に有効な問題を作成するためのさらなる努力が求められる。

A

問1 「お忙しいところおいでいただいて」という日常よく耳にする決まり文句への答えを求める問題。正答率は高かった。「별말씀」は決まり文句としては基本的なものである。

問2 「いま忙しいの？」と聞かれて「えっ」と聞き返されたときにどんなことを言うかを問う問題で、正答率は高かった。

問3 旅行にかかった費用を聞く言い方を答えさせる問題。日本語で「かかる」と訳すことのできる「걸리다」を誤答として準備したところ約2割の受験者がそちらを選び、この間の正答率が一番低くなった。良問との評価が出ている。

問4 友人がなかなか携帯電話に出ないという言葉を引き出させる言葉を求めた。短い対話文から状況を把握させる問題であり、正答率は高かった。

問5 聞きたいことがあって昼休みのとき探したが見あたらなかった友人にそのあと出会ったときの対話である。じっくり読めば状況は把握できるように設定してある。

問6 「いい人がいたら紹介してよ」という言葉に対して「ボーイフレンド、いるって言ったでしょう」という言葉を見つけさせる問題。「それ、いつの話よ」という冗談めかした言葉で、正答を導くことができる。かなりくだけた対話文だが、この程度なら高等学校生でも十分ありうる対話だと考える。

B かぶっている帽子をほめてくれた友人に対して、帽子は日焼け予防にもいいと言って勧めている少し長めの対話文である。

問1 「そう。ありがとう」という言葉から、ほめられていることが分かる。

問2 「それはそうね。私も皮膚が弱いから夏にかぶってみようかな」という言葉の内容から、それが「夏は日差しが強いから帽子をかぶるといい」という言葉への返事であることを推測できる。

C 日本と韓国の若者の、映画についての対話である。

問1 「どんな映画なの」という問いに対する答えを求めさせる問いだが、直後の文章でなくそのあとに来る説明を読まなくては正答を得られない。

問2 ここまでに、監督をはじめ日本人によって作られた映画だが背景は韓国だという情報が与えられ、このあとに、韓国人俳優も日本人俳優もほとんど韓国語を話すという言葉が来る。前後の状況から、この映画には韓国人俳優も出るという言葉が正答となる。

問3 「映画を楽しんで勉強にもなれば、もっといいじゃないか」という文の前に来る言葉を求めさせた。「君は何でも勉強だねえ」が正答である。

第4問 ある程度の長さの平易な文章を読ませ、書き言葉の表現の理解と文章の論理展開の理解能力並びに文中に含まれる会話文から正確に状況を把握する能力を測ることを目的とした。課題文は、けんかの絶えることのない中年夫婦と、仲良く暮らす若夫婦の家族を比較し、家族関係の築き方について比喩的に述べたエッセイで、受験者にとっても身近な一般性のある内容であったと考えられる。従来に比して課題文がかなり長いものとなったが、第4問の得点率は、約9割で、他の問題より高かった。

問1 「이해하기 어려운 수수께끼 (理解しがたいなぞなぞ)」という比喩的表現が具体的に何を指しているのかを、文脈から判断させる問題である。第一段落の文章の読解が正確にできていれば、正答に至ることが可能である。

問2 若夫婦家族の主人が中年夫婦の質問に答えるせりふから、逆説的な表現の内容を把握できているかどうかを問う問題である。

問3 指示詞を含む表現の意味内容を問う問題である。最後の段落の文章の内容が読み取れていれば、正答に至ることができる。

問4 全体的な内容の理解を見る問題である。選択肢が日本語であったためか、第4問の中でも、この設問の正答率は抜きんで高く、9割台後半となった。この点について、「高等学校教科担当教員の意見・評価」にも指摘があるが、問題作成部会としても、適正な難易度になるように、選択肢の内容や提示方法について改善を行う必要があると考えている。

第5問 課題文は、「学問」と「勉強」の本質的な違いについて、「疑う」「信じる」という二つの単語をキーワードにして、論述した文章である。文章の論理展開の理解能力を測ることを目的とした。各問題の正答率は、問1は低い値であったものの、その他の問題はおおむね高い値を示した。

問1 「学問」のキーワードである「의심하다 (疑う)」に対し、その対極の「勉強」のキーワードを選ばせる問題である。「学問」と「勉強」を対比的に記述するこの文章全体の趣旨が理解できていないと正答に至ることはできない。この問題の正答率は低く、約4割であった。正答は①의 믿음 (信じること) であるが、③의 가르침 (教えること) を選んだ解答が多かった。③의 가르침 (教えること) は、「의심하다 (疑う)」の対極をなす単語としては不適當であるので、誤答である。

問2 前後の文章をつなぐ接続表現を選ばせる問題であるが、前問と同じく、「学問」と「勉強」を対比的に記述するこの文章全体の趣旨が理解できていれば、正答に至ることができる。

問3 指示詞を含む表現の意味内容を問う問題である。第3段落の文章の内容が読み取れていれば、正答に至ることができる。

問4 前後の文章をつなぐ接続表現を選ばせる問題である。前後の文章の関係が理解できれば、正答に至ることができる。

問5 全体的な内容の理解を見る問題である。正答率は高く、約9割に達したが、選択肢の文章が韓国語で提示されていたためか、第4問の間4ほど高い数値にはならなかった。

3 出題に対する反響意見についての見解

個々の問題に関する意見に対しては、「各問題の出題意図と解答結果」のそれぞれの項で問題作成部会としての見解を述べた。したがって、ここでは問題全般にわたる意見に対して見解を述べることにする。

韓国ではごく限られた場合を除いて韓国文の表記に漢字を用いずハングル専用となっている。したがって、漢字の読みに関して出題することは不適切ではないかとの指摘が一部の高等学校教科担当教員からあった。この問題については昨年度までの高等学校教科担当教員からも不適切とは言えないまでも出題形式に工夫が必要ではないかとの指摘が再三あった。にもかかわらず今回の試験においても漢字の読みの問題を出題した理由は、昨年度までの高等学校教科担当教員で推測、了解されているとおりである。つまり、韓国語と日本語には膨大な量の共通の漢語語いがあるため、それらに対して漢字を意識させることは、短期間に語い力を養成する最も効果的な方法である、という日本における韓国語教育上の方便によるものである。文章形式で出題するなど出題方法の見直しの必要性については、意味の明白な語に関する限りは、文章形式で出題しても本質的に変わりはないと判断した。しかし、出題形式は今後の問題作成に当たって継続的に検討する課題としたい。

一部の問題の正答選択に関して、慣用の問題をどうするかとの指摘があった。規範と慣用の問題は作問過程で最も慎重を期している事項である。センター試験が高等学校教育を前提としている以上規範的な観点は重要であるけれども、規範から逸脱していると考えられても、慣用的に広く用いられている表現・語法については誤答に含めない、というのが作業方針である。出題された問題に関しては、母語話者委員全員一致の見解に支えられたものであることを付言したい。

上記の出題方針には明記されていないが、従来、問題作成に当たって、素材とする韓国語文はできるだけ自然なものとするのを心掛けてきた。特に、会話文問題や長文問題においてその傾向が強く現れている。これに対して、今年度の高等学校教科担当教員から、問題自体は平易なものであっても文章を自然にしようとする配慮によって、高等学校教育で可能な範囲を超えた語法が登場することになり、問題を実際以上に難しく感じさせるものとなっている場合があるのではないか、との指摘があった。平易な問題であればよりオーソドックスな文体にした方が高等学校教育の現場との結びつきがより密になるのではないかと、この点に関しては、問題作成部会においても議論されてきたことであるが、意見の一致を見ないまま自然さ重視の立場で作問に当たっている。高等学校教科担当教員からの指摘があったことをきっかけに再検討する必要があると思われる。

4 今後の問題作成に当たっての留意点及びまとめ

今回（５回目）の受験者は189名であった。初回からの受験者数の推移を確認してみると、初回99名、２回目169名、３回目174名、４回目213名と年を追うごとに受験者数が増加していたのであるが、初めて前年度より減少した。センター試験全体の受験者数が減少していることを考えれば、大して気にかける必要もないことかもしれないが、韓国語部会が抱えている積年の問題を考えると安閑としていられない変化である。

積年の問題とは、平均点と難易度とのほとんど二律背反的と言えるような関係をどのように改善するか、という問題である。今回の試験の平均点は155.29点であり、３年連続で150点台を維持することができた。しかしながら、依然として科目間格差は顕著に存在しており、さらに平均点を下げる努力が望まれている。そのためには現在の難易度を維持することが大前提となっている。一方、現在の問題のレベルでは、高等学校において６単位程度韓国語を学習した者にとっては、英語の平均点程度の得点は望むべくもないのが実情である。このことはかねてより高等学校の韓国語教育担当者から指摘されてきた。しかし、遺憾ながら、今年度もその要望に応えられないまま問題を先送りにしなければならない。高等学校側のいらだちが伝わってくる思いがするが、問題作成部会としても、「高等学校における学習の到達度をはかる」というセンター試験本来の機能を実現し高等学校教育の発展を後押しすることができないことに、高等学校側にも増していらいだちを覚えている。「韓国語」試験の受験者の大多数が民族学校出身者及び韓国からの帰国生と推測される特殊事情を考慮して、平均点の問題を度外視し高等学校の教育の実情にかなうレベルの試験問題を作成したいが、センター試験が大学入学者の選抜に利用されるという制度においては、科目間の平均点格差の解消という圧力はあまりにも大きいのが実情である。今後は、同じ問題を抱える中国語部会との意見交換などを進めながら継続的に道を探っていきたい。

これと関連して、高等学校教科担当教員から毎年のように、高等学校の教育現場における韓国語教育の実態調査をしてほしい旨の要望が出されてきており、問題作成部会でもその必要性があると認め善処を約してきた。今年度の部会でそれを実施しようと検討したが、問題作成員が直接調査に赴くことには問題があるとの判断により、部会としての実施は断念せざるを得なかった。したがって、来年度以降に大学入試センターに相談しながら取り組みたい。

今後の問題作成のための留意点としては、上に述べた事柄の他に、昨年度の報告書に明言されている出題形式や配点の見直しを行う必要がある。センター試験全体の作成方針があるため大きな手直しは難しいが、これまで評価委員会報告で指摘されてきた事項と従来のセンター試験の正答率の分析等を踏まえて、改変を模索すべき時期に来ている。特に、長文問題については、年々素材文が長くなっているにもかかわらず問題数は変わっていないため、長文問題の出題意図が十分に生かされておらず配点あるいは難易度のバランスを欠いているとの指摘があった。早急に検討し対処すべき問題であると考えらる。